

第 9 章

『渦』

(The Whirlpool, 1897)



James Jacques-Joseph Tissot
“Hush, the Concert!” (c. 1875)
Manchester City Art Galleries

作品の梗概

ときは1886年、37歳のハーヴェイ・ロルフ (Harvey Rolfe) は、1年前に亡父の友人で名付け親のハーヴェイ博士 (Dr Harvey) の遺産として年取900ポンドあまりを得る身分になった。約10年続けた事務職に別れを告げ、いまや夜はクラブで過ごす優雅な独身男性、その夜は投資会社「ブリタニア」の創業者ベネット・フロシingham (Bennet Frothingham) の噂が出た。クラブを出た彼は親友ヒュー・カーナビー (Hugh Carnaby) 宅へ向かう。彼の屋敷に泥棒が入ったと聞いたからだ。カーナビーは35歳、名門の出だが相続財産は少なく、結婚して1年になる妻のシビル (Sybil) は、ロルフには魔性の女に見えた。泥棒は家政婦の手引きで入ったらしいこと、シビルの全財産はブリタニアに投資していることなどが話題になった。

前の年の冬に訪れたライプチヒの音楽会でロルフは初めてフロシinghamの一人娘アルマ (Alma, 先妻の子) に会い、以来フロシingham邸に出入りするようになっていた。アルマは王立音楽院でヴァイオリンを学び、自宅で開くコンサートにロルフも招かれた。才能はともかく、頬をバラ色に染めて演奏するアルマの美しさに彼は目を奪われる。だがその夜も父親のフロシinghamの姿はなく、ここ2、3週間は忙殺されて自宅に帰っていないとのことだった。

翌朝銀行に金をおろしに行ったロルフは、ブリタニアが業務停止になったと聞き、そこへきたカーナビーはフロシinghamが昨夜ピストル自殺を遂げたと告げる。ロルフは美しいアルマにのぼせてはみたが、しょせん彼女は異星人 (alien) であり、ブリタニアは金銭欲をあおただけの泡沫と考え、アルマとの交際を絶つ決心をする。そこへ友人のエドガー・アボット (Edgar Abbot) の妻メアリ (Mary) から電報がきた。行ってみると、アボットが昨夜急死、神経痛の鎮痛剤モルヒネの過飲による死亡との診断だったが、地方の新聞社を買い取って再起するはずだった彼は、ブリタニアの倒産で資金のすべてを失ったのだ。退屈な田舎暮らしを嫌い、夫の破産を内心喜んだ自分が許せないメアリは、おりしも捨て子になっていた従妹の子ども二人を養育すること

で罪の償いを決意する。夫の悲劇を魂の再生の機会にと願う彼女の姿勢に感動したロルフは、子どもたち（父親は彼の学友）の養育費の援助を申し出る。

フロシガムは妻（二度目の妻）に多額の資産を残していたが、娘のアルマに遺されたものはなかった。24歳になるアルマは音楽で自活しようと考へ、修行すべく継母の仕送りでドイツに旅立つ。だが観光客同然の、ヴァイオリンを忘れたような日々の中、フロシガム邸の常連だった作曲家のフェリックス・ダイムズ (Felix Dymes) と富豪のサイラス・レッドグレイヴ (Cyrus Redgrave) が相次いでドイツにアルマを訪れ、いずれも愛人にならないかと持ちかけてきた。自尊心を傷つけられ、どちらも言下に退けたものの、アルマは傷心を抱いてロンドンに帰り、ロルフとも再会する。父の非業の死という経験にも成長しないアルマを知りながら、ロルフは彼女の美貌と若さの魅力に負け、ついに求婚する。父の転落の反動からか、アルマはしきりに「簡素な生活」にあこがれ、北ウェールズで彼らの新婚生活が始まる。

美しい自然に抱かれたカーナボンシャー (Caernarvonshire) での生活はひとまず平穏に過ぎ、3年目に入るころアルマは長男を出産した。ヴァイオリンは埃をかぶり、アルマは水彩画をはじめた。やがてメアリ・アボットが招かれてやってくると、田舎暮らしに飽きあきしていたアルマは見違えるように元気になり、誉められたくてヴァイオリンを弾き、水彩画を見せる。次の日は彼女と夫を丘陵地帯へ散歩に出し、自分は自家用の二輪馬車を独力で操って山道を走らせ、事故か故意か、身ごもっていた第2子を流産する。

盗難事件とフロシガム事件のあと、オーストラリアで鉱山業にかかわっていたカーナビイが帰国し、さらに自転車業に着手していた。息子の教育が気になるロルフは、ウェールズを引き払ってロンドン近郊のピナー (Pinner) に引っ越した。アルマの社交生活も再開し、集まりで知り合ったミセス・ストレンジウェイズ (Mrs Strangeways) らの追従にのって、またヴァイオリンを始めたアルマは、ダイムズやレッドグレイヴと顔を合わせる機会がふえる。メアリ・アボットからきた手紙を盗み見て、子どもの養育費への感謝の言葉を読んだアルマは、メアリと夫の関係を邪推、男女間には秘密があるのが世間なのだ結論する。そしてプロの音楽家になって夫を見返してやろうと決意する。ロルフがそんな妻を黙認する一方、アルマとしては、デビュー・コンサートのために曲目やホールを選定し、切符を売りさばき、業界紙などで宣伝するためには売れっ子作曲家のダイムズの口利きが必要であり、各界にコネを持つレッドグレイヴの財力を頼む必要があった。最後の一线は守りながら夢の実現のために彼らを利用してみせるとアルマは密かに計

算する。

そのころレッドグレイヴはカーナビイの自転車事業にも融資していたが、これはシビルとレッドグレイヴの間に親密な関係があるからだアルマはにらんでいた。一方、カーナビイは自宅の盗難事件で泥棒の手引きをした家政婦に偶然出会う。警察に突き出すという彼に返す言葉で彼女は、シビルはレッドグレイヴと愛人関係にあると告げる。すぐさまレッドグレイヴのバンガローに向かったカーナビイは、女の先客といたレッドグレイヴを見て逆上し、応対に出てきた彼をその場に殴り倒す。先客はアルマだった。翌日にせまったコンサートの打合せにきたとのこと。アルマを帰し、医者が呼ばれ、相手の男は殴打と転倒による即死と診断された。カーナビイは自首し、妻にすべてを話したが、ロルフへの気遣いからアルマが現場にいたことは伏せた。翌日の新聞で事件を知ったアルマは、自分の名前が出ていないことに安堵して、1892年5月、初演奏会を無事におえる。だがこの前後のストレスから神経が高ぶり、睡眠薬なしには眠れなくなっていた。カーナビイの裁判が開かれ、禁固2年の判決が下りた。

巨大な渦に巻き込まれまいと独り故郷を訪れたロルフは、幼なじみのバジル・モートン (Basil Morton) 宅に滞在した。鉄道技師だった父を10歳でなくし、たった一人の妹エイミ (Amy) の声も聞かず、情欲に負けた無節操な青春の日々が、蓮っ葉娘だったリリー・バートン (Lily Burton) の苦い思い出とともに甦った。妻であり母であることを喜びとしているミス・モートンを見ると、家事も育児もおごなりのアルマが他人のように思えた。帰路の途中でロンドンに出て、彼の援助で写真業を始めた若い友人セシル・モーフェウ (Cecil Morphew) を訪れた。モーフェウには婚約して8年になるハリエット・ウィンター (Harriet Winter) がいたが、事務弁護士の彼の年収300ポンドが低いといって結婚を許さなかった彼女の父親が死んだとのことだった。写真業は少しずつ滑り出していたが、ハリエットはモーフェウの若き日の女性関係を探り出して結婚を拒否、彼らの永い春は永遠に終わらない。

息子ヒューイ (Hughie) の学齢期が近づき、ロルフはしぶるアルマを説得して、元教師の経験を生かして、いまや子女の教育で高い信頼を得ているメアリ・アボットの住むガナーズベリーに転居する。アルマは3人目の子どもを宿すが、彼女の心にはレッドグレイヴの殺害事件と、彼とシビルの関係に対する嫉妬心が重くのしかかっていた。ロルフは妻の苦悩を知りながら、相変わらず黙殺するだけ、妻の睡眠薬の常用にも気づかなかつた。3月末に女兒が生まれるとアルマは赤子に深い愛情を示し、母乳すら与えようとした

が、薬の常用でそれができないと医者にいわれて、激しく泣いた。2週間後、命名もしないうちに赤子が突然死する。アルマの悲しみは尋常ではなかったが、その危篤状態を脱すると、息子にも家事にも無関心なアルマに戻った。

いまやコミック・オペラ界の寵児となったダイムズが花火業者の一人娘と婚約したこと、シビル・カーナビイが社交界に復帰したことなどが新聞紙上をにぎわしていた。ダイムズは演奏会の収支決算が130ポンドの赤字になったとアルマにいい、返却にはおよばないと微妙に言葉を濁したが、アルマは夫に頼んで全額を返却した。刑期を終えたカーナビイが出所してきた。シビルからアルマがあらぬ噂を振りまいていると聞かされた彼は、事件の晩にレッドグレイヴのバンガローにいたのは、アルマだったと打ち明ける。シビルは嫌がる夫を説得してロルフ夫婦を自宅に呼び、真相を明かさせる。追い詰められたアルマは、わが身の潔白を信じさせる方策がないことを知って孤立、ヒステリックに笑う。そしてその夜、睡眠薬の瓶に何度も手を伸ばし、二度と目覚めない床についた。

ロルフは息子のヒューイとともに故郷グレイストーンに住むことにした。メアリ・アボットが育てた子どもたちも自立の道を見つけ、彼女自身も良縁を得て結婚した。カーナビイは自転車製造業が軌道に乗り、シビルは株式長者の妻レディ・イゾベル・バーカー (Lady Isobel Barker) と組んで、働く女性労働者のための運動の先頭に立っている。モーフェウは「永い春」にピリオドを打ち、写真業をロルフに託してニュージーランドに旅立った。ロルフの息子ヒューイは7歳、父親が通った学校に進む日も近い。

ギッシングと姦通小説

第1節 独身か、結婚か

富山太佳夫氏はヴィクトリア朝の小説に引越しがあたりまえのように出てくることに注目し、夏目漱石のロンドン留学にまつわる考察の参考として、ジョージ・ギッシングの短篇集『蜘蛛の巣の家』(1906)を「引越し小説集」と呼び、ギッシングが描いた引越しをめぐるいじましい人間模様は、フィクションであると同時に、まぎれもない「歴史の表象」であると述べている。¹『渦』の主人公ハーヴェイ・ロルフも結婚後7年足らずの間に4回引越す。引越しは彼だけがするのではなく、結婚や伴侶の死など、それぞれが人生の節目ふしめに住まいを転々とする。そうした中、ギッシングがとくに詳しく描写した住まいがいくつかある。豪邸や屋根裏部屋、また新しく生まれ、やがては都会を埋め尽くすフラット群、富裕な身分を誇示するべく流行したバンガローなど、変動する時代の要請によって変化する住居形態は、そこに入りする人間の体験を演出する空間となってギッシングの目に映ったようだ。ときあたかも19世紀末、小説『渦』の登場人物が選んで住んだ住居のそれぞれが結婚観や職業観や道徳観の変化のメタファーであり、ひいてはヒロインの姦通という小説ならではのテーマにつながったことを考えてみたい。

ハーヴェイ・ロルフの住まいの中で最も注目に値するのが、彼が結婚する前に住んでいた家である。長年にわたる下宿暮らしを脱した彼は、年収900ポンドにふさわしい住まいを探し、ベイズウォーター(ハイド・パークの北側を走る道路)にこの家を見つけた。一軒の邸宅を数室に分割し家具付で貸し出された「アパート」で(家賃は不明)、家主は最初、初老の未亡人だったが、独身男性ばかりを好んで部屋を貸したこの女家主は、まもなくあっけなく死んでしまい、バンコム(Buncombe)という男が次の家主になった。聞いてみると彼の妻は結婚して5年目に子ども二人を残して家を出て、いまは二流のホールで歌手をしていた。バンコムは美人で声のいい妻に未練があり、大きな屋敷を手に入れたのも、妻の関心を取りもどしたいがためだった。

バンコムは家の最上階に親戚筋のミセス・ハンドーヴァ (Mrs Handover) を家賃も取らずに住まわせてやっていた。ある日この女性がロルフの部屋を訪ねてきて、家政婦として雇ってほしいと申し出る。社会的なランクがほぼ同等な女性に皿洗いや床磨きを命じるなど論外のこと、ロルフが断ると、彼女は聞くも涙の身の上話を始めた。身分の低い男との結婚が間違いでした、夫は暴力をふるい、別居しまして、今では息子に養われ、などなど。この手の話は何より苦手なロルフは、すぐさま彼女を雇ってしまう。だがものの1週間もすると、夫が家を出た原因は、掃除一つしない「主婦としては最低」のこの妻にありと思ひ当たる。しかし彼は「デリケートで、道理を含めるのは億劫な男」で、本来なら即刻クビにすればいい無能な女に、「一流の召使二人分の給料に笑顔までつけて」(24) 支払うありさま。当時ロンドンでは女中頭をかねる家政婦の賃金は年に10ポンドから20ポンドが相場²、ロルフはいったいいくら払っていたのか。ギッシングの『余計者の女たち』(1893)のマドン姉妹の一年間の生活費はわずか17ポンド、おまけに週7シリングの家賃もここから出していたのだから、家賃はただ、息子からの仕送りもあり、なおかつ年に20ポンドはくだらない給金があったミセス・ハンドーヴァは、マドン姉妹には雲の上のまたその上の人に見えただろう。

小説のはじめに出てくるこのエピソードほど、わが主人公ロルフを的確に伝えるものはない。³家主の妻が歌手になりたくて家庭と子どもを捨てるというプロット上の符合も見逃せないが、何よりもロルフは他人の身の上話にすぐ動かされ、その動揺から逃げるために、多少の出費は犠牲にしても、その場で何らかの手を打ってしまう。その判断の誤りをすぐさま自覚するものの、事態の改善を図るべき行動には出ない。なるほど彼はケチに見られぬよう若いときから「金を軽蔑していた」(331)が、反面、「熟慮の上で何かを決めた」(131)こともなく、ことにもつれた人間関係や、細々とした家庭の雑事から一刻も早く逃げたい男なのだ。だから、年収が安定したら結婚するというヴィクトリア朝定番のシナリオは、ロルフには無縁だった。ベイズウォーター界隈を散歩する彼の心境はこうだった。

[...] and, as he walked about the streets of the neighbourhood, Harvey often wondered what abnormalities even more striking might be concealed behind the meaningless uniformity of these heavily respectable house-fronts. As a lodger he was content to dwell here; but sometimes by a freak of imagination he pictured himself a married man, imprisoned with wife and children amid these leagues of dreary, inhospitable brickwork, and a great horror fell upon him. (26)

「40歳になれば・・・本能をねじ伏せられる」(21)だろうし、「この上ない愚行」である結婚を回避して、独身を通してきたことは「人生でもっともすばらしい事実」(26)だった。そんな彼が結婚するのが人生である。だが「熟慮の上で」決めた結婚ではない。理想の女性に出会ったからでもない。とどのつまりアルマの美貌と若い肉体の魅力に屈したからだ(31, 32, 110, etc)。結婚の日が決まり、引越しの日がきて、いざ荷物を運び出す段になると、床に積もった埃がもうもうと舞い上がり、作業員全員が咳き込むほど。ところが床の埃の張本人ミセス・ハンドーヴァはイケしゃあしゃあと、「もしまた家政婦がご入用でしたら—」(130)という。勝負あった。ロルフはやらずもがなの退職金として10ポンドもの大金を小切手で渡すのがやっと。やがて家主のバンコムが挨拶にきて、あなたは結婚なさる、私は離婚するところですという。歌手になった妻は戻らなかったのだ。ロルフは思い出のベイズウォーターをあとに、新妻とともにウェールズへ引越していく。

第2節 屋敷か、フラットか

ロルフには親友が二人いる。一人はヒュー・カーナビイで、もう一人がミッドランドの故郷グレイストーン(ギッシングの故郷はミッドランドのウェイクフィールド)に住んでいる幼なじみのバジル・モートンである。ちなみにロルフの長男ヒュー・バジルは、この二人からもらった名前だ。ギッシングがあきらかに羨望をこめて描いたのがモートンの住む屋敷である。150年前に建てられ、モートン家の所有になって80年。三男の彼はケンブリッジ大学に進み聖職者を目指したが、兄の死後故郷に帰って父祖伝来の穀物商をついだ。1880年後半という時代の流れは農産物の収益を減らしていたが、昔ながらの商法を守り、穀物の品質検査も手がけるモートンは、穀物の匂いと手触りを心から愛していて、その感触こそが人間らしい感情を豊かにすると信じている。

ラテン語で「日は影のごとくに過ぎる」(322)と書かれた文字盤が客を迎えるモートンの屋敷は、堂々とした造りが落ち着いた快適さをもたらし、年月をかけて集めた蔵書は数千冊をこえ、一日の仕事をおえたモートンは、ツキジデスやタキトスの本を開いてローマ帝国に遊ぶのが何よりの楽しみであった。子どもは12歳の長男ハリー(Harry)を頭に4人、一日中何かしている健康美人のミセス・モートンが取り仕切る屋敷は、結婚後のロルフにとっ

て、夜の静寂と熟睡が約束され、朝食が楽しみな唯一の場所になる。

ロルフは、モートンは幸福な男には違いないが、その幸福は「一万人に一人の例外」(335)だと考えている。小説のタイトルの「渦」は、時代の激動や喪失感覚を表すキー・メタファーとして要所要所に出てくるが、とりわけ印象的なのは、昔ながらの伝統を守るモートンの生活を「型」として「渦」と対比させたシーンである。

[...] for Morton had neither the means nor the desire to equip his house with perfections of modern upholstery; but every detail manifested a care and taste and delicacy found only in homes which are homes indeed, and not mere dwelling-places fitted up chiefly for display. [...] why he, himself, before his marriage, had smiled at the old-fashioned stability represented by such families as the Mortons; had talked of “getting into ruts,” of “mouldering,” and so on. He saw it from another point of view now, and if the choice were between rut and whirlpool— (327-28)

もう一人の親友ヒュー・カーナビイは、軍人の兄マイルズ (Miles) と、宣教師の妻になった妹ルース (Ruth) がおり、ヒュー本人はいろいろな経営に携わって年収 700 ポンドを上げていた。「お洒落な未亡人の美人で利口な娘」(9) という経歴で出てくる妻のシビルにもそれに近い年収があり、⁴ 彼らはハミルトン・テラス (リージェント・パークの西側にある、奥まった通り) に豪邸を構え、使用人を数人使って、二人の合計年収を上回る贅沢な生活を送っていた。

そこでおきた盗難事件にブリタニアの倒産が重なり、結婚後の「娯楽と贅沢と浪費におぼれた無為の一年」(58) に内心疲れていたカーナビイは、「働かないで暮らす時代ではない、何とかして金を稼がなくては」(59) と考え、友人の鉱山業に参加すべく当面オーストラリアへ移住する。その仕事に一段落をつけて帰国したカーナビイ夫婦が、ロンドンで新たに選んだ住まいが「フラット」だった。⁵ オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マンションというのは架空の建造物だろうが、リージェント・パークに馬車ですぐ出られる場所にあるそのフラットに、シビルは豪華な内装を施していた。

Here was no demonstration of the simple life; things beautiful and luxurious filled all available space, and indeed over-filled it, for Sybil had tried to use as much as possible of the furniture formerly displayed in Hamilton Terrace, with such alteration and novelties as were imposed by the fashion of to-day. (172)

このフラットとモートンの屋敷は、色々な意味で対照をなしている。快適な住まいとしての家と、客に誇示するための家、広い庭のある屋敷と、壁一枚むこうに他人がいるフラットでは、住む人間の意識や想像力はもちろん、空間が与える感化力も違って来る。しかし屋敷とフラットの是非が問題なのではない。ギッシングはフラットまたはバンガローといった新形式の住宅に人が住んだらどうなるか、それを創作のヒントにしたのだ。『余計者の女たち』の若い人妻モニカ (Monica) の恋人はフラットに住んでいた。フラットは共同住宅だから、同じ入り口から入った人がどの部屋に入るのか、階段を降りてきた人がどの部屋から出てきたのかがわからない。そのためにモニカは不安に駆られ、生じた誤解が人間不信を招き、彼女の運命が暗転する。モニカとフラットの逸話は、住まいの変化が人間関係を微妙な影を落とし、その先に人間疎外が待っている時代を暗示しているといえる。

第3節 働くべきか、働かざるべきか

年収900ポンドの身分になるまで、ロルフは何をしていたのか。自ら認める放蕩無頼な青春時代を送り、21歳で信託財産2千ポンドを受け取ると、医学を志して入ったガイズ・ホスピタル (Guy's Hospital) もさっさと中退、海外旅行や遊興で金を使い果たしたとき、運よく移民業務代行業に働き口が見つかった。移民志願者と面接し、移民の宣伝ポスター用に名文句を思いつくなど、この仕事は年に200ポンドの収入になった。他方、毎日のように「悲惨と敗北に打ちのめされた人間模様」(23)を見せられると、希望の新天地へなどという「嘘」をついて移民を奨励する仕事にやりきれなさを感じていた。⁶だからロルフは遺産が入るとすぐ仕事をやめた。

例えば4~5%の利回りの資産運用などで年収を確保していた「働かざる」紳士はヴィクトリア朝小説にはたくさんいるが、⁷『渦』の中で「働かないで」暮らしているのはロルフとレッドグレイヴの二人だけだ。たとえば『高慢と偏見』(Pride and Prejudice, 1813)では年収1万ポンドのミスター・ダーシー (Mr Darcy) が株式新聞を見るシーンはどこにもないが、1897年のわがロルフになると、結婚前は「永久不変」とみていたスエズ運河株が、結婚後はその変動が気になって、「資本が生み出す金は1ペンスでも必要だった。・・・鉄道の駅の本屋で経済紙を買い・・・経済用語を理解しようと苦心」(208)している。年収1万ポンドといわれるレッドグレイヴも、「資産の運用は自分でしている」(212)。ともあれ『渦』に出てくる男たちの仕事は、「働かざる」金融

業と、「働く」製造業の二つに分けられよう。

金融業を代表するのがフロシガムである。彼は「南のほうの正体不明の金持ち」から「北部の高台への上がり」(30)、「ブリタニア融資保険投資銀行株式会社」“*Britannia Loan, Assurance, Investment, and Banking Company, Limited*”を一代で築いた。「北部の高台」とはハムステッド・ヒース(Hampstead Heath)のこと、彼の豪邸はその西にあるフィッツジョン・アヴェニュー(Fitzjohn Avenue)にあった。アルマはここで演奏会を開き、ロルフもその夜はフロシガム邸の「名高い大盤振る舞い」(40)に招かれていた。演奏がすむとアルマはロルフを相手に、その晩も帰宅しない父親の話を始め

る。

A year ago papa took me into the City to see the office of *Stock and Share*, just after the paper started. [...] After we had seen the printing machinery, and so on, he took me up to the top of the building into a small room, where there was just a table and a chair and a bookshelf; and he told me it was his first office, the room in which he had begun business thirty years ago. (40-41)

これが注目すべき三つ目の住まいである。その夜、フロシガムは独りビルの最上階に上がり、30年前に第一歩をしるした「小さな部屋」でピストル自殺を遂げた、しかもアルマがその部屋を思い出していたその時刻に。自殺遺体は翌朝早く、一人の男によって発見された。なぜ夜明け前にビルの最上階まで上がったのかと聞かれた彼は、妻と喧嘩をしていて「家ではろくに眠れない」(47)ので、寝るところを探していたよし、彼も家に帰らない男だった。

金融業の男たちはフロシガムの自殺のあと、共同経営者ウィグラム(Wigram)は投獄され、その妻は慈善施設に入所、続いてエドガー・アボットが死に、さらにレッドグレイヴが殺されて死ぬ。その事件のせいで一時身を隠していたシビルを社交界に復帰させたレディ・イゾベル・バーカーの夫は、株で大金持ちになった「平民」のバーカー氏である。アルマの友人のリーチ姉妹(Leach)は器量も頭も悪く、求婚者が一人もないのに、事務弁護士のリーチ氏は、そんな娘と妻を遊ばせておくために東奔西走、まだ50歳というのにもう老人である。つまり大勢いたはずの「働かざる」男たちは、いつのまにかあくせくと「働く」ばかりの人間になり、自宅にも音楽会にも姿を見せなくなっていたのだ。

一方、「働く」製造業はどうだったか。先述したカーナビイの鉱山業とは、新しく開発した「原鉱から金を精製する方法」(14)によって、⁸これまで廃棄

していた物資から貴重な資源を精製するというものだった。今でいうリサイクル資源であろうか。これが最初の不安を払拭して、順調に稼動しはじめる。次いでカーナビが目つけたのが自転車だった。帰国してコヴェントリーで始めた自転車製造業が彼に大きな利益をもたらすのはいうまでもない。自転車の爽快さを何にたとえよう。かの漱石先生も自転車に乗ったし、⁹自転車の流行でファッションにも下着にも革命が起きた。¹⁰

セシル・モーフェウは賭博か投資で派手に儲けるのが夢だったが、心を入れ替えて写真業に関心を持った。チェルシーに借りた狭くて暗い屋根裏部屋を暗室にして写真術の研究を始めた彼に、ロルフは開業資金の援助をしている。悲劇の現場となった最上階の小部屋にくらべると、チェルシーの屋根裏部屋の未来はずっと明るい。1836年のダゲレオタイプ以来、どんどん改良された写真術がどれほど人々に歓迎されたことか。イギリス人ほど肖像画が好きな国民もないが、画家に肖像画を依頼できない階層の人々も写真で家族や自分のポートレートを居間に飾ることができた。ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-98) は 1856 年にはじめてカメラを買い、少女たちの写真をたくさんとった写真家としても有名である。¹¹

メアリ・アボットが育てた二人の子どもは、上のアルバート (Albert) は海軍に入る道を選び、下のミニー (Minny) は料理の道に進む。「10年もたてば、一人前の女の料理人は好きなだけ給料が取れるようになるよ・・・人間を常識に立ちかえらせるには胃袋がいちばん力があるからね」(341) とロルフにいわせたギッシングはまるで預言者である。百年も前にリサイクル事業、自転車、写真、料理人に目をつけていたとは。ちなみに「魚を食べると頭がよくなる」(342) とは、モートンがひよわな息子ハリーに言い聞かせる言葉である。このあたり、一つの時代の終わりを惜しむ気持ちの裏に、それを肯定するふしもあって、ギッシングは新しい時代の息吹や胎動がよく見えた作家でもあったと思う。

コミック・オペラの作曲家ダイムズもまた自力 (才能) で「働く」男である。「産業革命期のロンドンは、ヨーロッパの一流音楽家にとって、いわば公演市場であった。・・・1830年代以降・・・アマチュア・オーケストラの演奏会をはじめ入料の安い公開演奏会も開かれるようになり」、¹² ヴィクトリア朝は音楽が広く大衆に愛されるようになった時期だった。2000年に出た小説『ロンドン』の第18章 (年代は1889年) には、上流階級のオペラ好みと庶民向けのミュージックホールの間にギルバートとサリヴァンのオペレッタが位置づけられ、多くの観客が熱狂したとある。¹³これが「サヴォイ・オペラ」で、

作詞担当のギルバートと作曲担当のサリヴァンは、平素は口論ばかりする仲だったようだが、¹⁴ このコンビが作った『ペンザンスの海賊』(*The Pirates of Penzance*, 1879) や『ミカド』(*The Mikado*, 1885)などは、巧みな構成と美しいメロディーで大好評を博した。ヴィクトリア女王も大ファンだった。なお『ミカド』は2000年にもサヴォイ・シアターで上演され、怪しげな漢字が並ぶ垂れ幕の前で、日本人に扮した役者が珍妙なキモノを着て歌い踊り、主役のナンキ・プーはコリン・リーが演じ、観客を大いに楽しませていた。

不仲のコンビが作ったオペレッタが美しかったように、粗野で傲慢なダイムズが作ったメロディーも甘く美しく、大衆の心をつかんだ。彼は花火業者(これも当時繁盛した商売)の令嬢と婚約し、富裕階層にのし上がっていく。劇場文化が隆盛を見せ、男女を問わずさまざまな才能を開花させた俳優や歌手が輩出した、この時代特有の熱気がダイムズによく出ている。¹⁵

第4節 家庭か、キャリアか

男が働きはじめたとき、女はどうだったろう。『余計者の女たち』のローダ(Rhoda)やメアリ・バーフット(Mary Barfoot)のように定職を持った女性は『渦』には出てこない。¹⁶ 働く男たちは臆面もなく家庭を捨てたが、女が働くときは、やはり「家庭か、キャリアか」が問題になった。この岐路に立ったのがロルフの妻アルマである。彼女は家事にも育児にも専念できず、時間とエネルギーをもてあます一方で、稀代の相場師だった父の挑戦者の血が自分にも流れていると信じたかった。北ウェールズからピナー(今はヒースロー空港の北側にある町)に移るやいなや、自宅から「ほんの30分」(186)のロンドンに出ることが多くなる。一度だけとはいえ、最終列車に乗り遅れた夜は、既婚婦人の特権とばかりにホテルに泊まり、翌朝平然と帰宅した。夫も朝帰りをしているのではないか。そして慈善演奏会で演奏したりするうちに、プロになる野心をくすぐられ、ドイツ留学の苦い思い出を忘れたように、ふたたびヴァイオリンを取り上げ、その練習の音が朝から家中に鳴り響く。

ギッシングの『三文文士』(1891)に出てくる文士たちは、「芸術を商売にする」¹⁷ ことを求める時流に強く反発しながら、「芸術」にも「商売」にもならない小説しか書けなかった。かりに卓越した才能があっても、こと芸術で世に出ることほど危険で難しいことはない。だから、音楽上の才能も芸術に対する愛も使命感も十分でない(245-46)アルマが、身のほど知らずのキャリアの夢に敗れるのは当然の結果というほかない。それに家庭よりキャリアを選ん

だ女性としては、すでにあのバンコムが妻がいた。もう一人がアルマの実母だった。アルマの母(名前は不明)はその美貌で若き日のフロシガムを射止め、かつ生来の美声を生かして歌手を目指したが成功せず、ある日劇場から興奮して帰り、脳出血で急死した。母は27歳、アルマが8歳のときだった(136)。アルマの予兆ともいべき女性が二人いて、一人は挫折し、一人は曲がりなりにも歌手になった。つまり「家庭か、キャリアか」という問題は、二つの絵解きでひとまず方向が示されている。では似たようなエピソードを二つも挿入したのはなぜか。それは作者がアルマの遭遇すべき現実を「家庭か、キャリアか」ではないところに置いたからではないだろうか。アルマの夫は妻の行動には干渉しない主義を標榜している(243)。となればアルマは板ばさみに苦しむ必要はない。なるほど『渦』にも「既婚女性が仕事を持つことは」(337)といった議論があり、女性とキャリアの問題は継続している。だが作者は『渦』のテーマをその先に見ていたはずだ。なぜならプロのヴァイオリニストを目指すアルマと、タイピストから秘書養成所の経営者になるローダは同列には論じられないからだ。といっても父親が買い与えた名器ヴィヨーム(188)もアルマの耳には響かない。¹⁸ そんなアルマに作者はなぜヴァイオリンを選んだのか。それは「家庭か、キャリアか」の背後にあるもう一つの誘惑にアルマを直面させるためではなかったか。

第5節 貞節か、姦通か

もう一つの誘惑とは、すなわち姦通の問題である。トニー・タナーは *Adultery in the Novel* (1979) の冒頭で、「小説はその起源から違反をモデルとしてきたわけで、時代の既存の通念にある枠組みを打ち壊し (break), 混ぜ合わせ (mix), 異物を混入してきた (adulterate) ようだ」と述べ、さらに「静止した左右対称形を作る結婚よりも、むしろ不安定な三角関係を築く姦通というものが西洋文学の生成形式であった」と述べているが、近代社会の基盤である結婚制度という「契約」を破壊する「違反行為」としての「姦通」がなぜ「小説」のテーマになるかを言い当てた至言である。¹⁹ すでに小説家として名を上げていたギッシングにも同様の認識はあっただろうし、「姦通」のテーマがつねにその念頭にあったことは十分に予想できる。

じつは「余計者の女たち」にすでに姦通という問題は出ていた。モニカは姉たちの悲惨な貧乏だけは絶対に味わうまいと、年収600ポンドに引かれて、愛してもいないウイドソン (Widdowson) と結婚した。モニカはやがてある集

まりでビーヴィス (Bevis) という青年と知り合い、彼には同居している妹がいる安心感から、彼の自宅を訪れる。それがフラットで、慣れないモニカを不安にしたことは前に触れた。その共同住宅にローダの恋人エヴァラード (Everard) も住んでいた。ウイドソンが妻の行動を不審に思い、探偵を雇って調べさせた結果、妻の逢引の相手をエヴァラードだと判断したのもフラットゆえの誤解だった。モニカはビーヴィスに夢中になるが、男は人妻と遊んでみたかっただけ。さすがにそれに気づいたとき、モニカは皮肉にも妊娠していた。最後の一線は越えていない、子どもは夫の子だ、という事実を証明するのは、ビーヴィスがよこした空々しい手紙の中の、ほくらの仲は「清いものだった」という言葉しかない。²⁰しかしそれもこれもウイドソンの疑いを晴らすことはできなかった。姦通は犯していないという事実が真実として通らない現実を知ったモニカは絶望の中、生まれたばかりの女兒を残して死ぬ。医師だったが楽道家の父の死後、自活するために女店員になったモニカはまだ22歳、知性も経験も情熱もなく、いわば姦通という古来のテーマに遭遇するには実力不足だったというほかあるまい。

では『渦』のアルマはどうだったのか。美貌の母と大相場師だった父の娘アルマには、だれもが認める美貌にくわえ、異性をひきつけて離さない天性の魅力があり、工藤庸子氏のいう「男たちが夢見る『フェミニテ』の魅力」によってロルフを圧倒している。²¹

Her image haunted him; all his manhood was subdued and mocked by her scornful witchery. From the infinitude of reverie, her eyes drew near and gazed upon him—eyes gleaming with mischief, keen with curiosity; a look now supercilious, now softly submissive; all the varieties of expression caught in susceptible moments, and stored by a too faithful memory. Her hair, her lips, her neck, grew present to him, and lured his fancy with a wanton seduction. (102)

まるでラファエル前派が好んで描いたファム・ファタルを見るようだ。アルマのこの強烈なセックス・アピールは、ロルフに満足りた独身生活を捨てさせただけでなく、ダイムズやレッドグレイヴといった世間と女を知り尽くした男たちにも抵抗できない力があつた。フロシingham邸の常連だったレッドグレイヴは40歳の独身資産家、ウインブルドンに住む姉ミセス・フェニモア (Mrs Fennimore, 夫はインドに単身赴任中) の荘園の敷地内に当時流行のバンガローを建て、さまざまな客を招待していた。アルマのデビューにはその財力に物をいわせて多方面に画策したが、それは彼女という代償を当てにし

た行動であった。作曲家ダイムズは選曲とか会場の選定などを理由に、あからさまにアルマに言い寄ったが、二人の男たちの下心を十分に察した上で、アルマは彼らを利用しようと心に決める。

ところがアルマには伝統的な貞操観念、つまり、北條文緒氏のいう「プロブラティアティの感覚」がそなわっていた。²² 婚約中も「恋にはつきものの愚かにも楽しい行為には興味を示さず」、その「処女らしい気高さ」(125)にロルフは賛美と敬意を払うだけで我慢していた。結婚して一児をもうけたアルマは、ますます円熟し輝きをましたその美貌で、ダイムズとレッドグレイヴの目をふたたび強く惹きつける。ヴァイオリニストになりたいという彼女の野心は、彼らにとってはむしろ誘い水となった。アルマは彼らの物慣れた執拗な誘いを巧みにかわしては、「これは火遊びだ・・・しかし、無傷のままゲームを終わらせてみせる」(226)と決意し、その後も「肉体的には毅然としていよう」(239)と繰り返し自戒している。

その一方で、夫婦生活や妊娠を読者の目から隠そうとするギッシングの省筆に目を凝らせばわかるように、アルマは夫との夫婦関係も良好だった。6年余りで3回の妊娠(アルマは歓迎していない)がそれを物語っている。²³ ということは、アルマは貞節な妻であり、姦通を犯す女(adulteress)ではないことになる。「アダルトレス」であることで世界文学史上に揺るがぬ地位を築き、工藤庸子氏をして「十九世紀小説の『新しい女』はエンマ・ボヴァリーにはじまり、エンマ・ボヴァリーにつきる」²⁴とまでいわしめた「マダム・ボヴァリー」になりえないわが「ミセス・ロルフ」は、そのゆえに、シビル・カーナビイというもう一人の女の存在なしには、姦通という「違反行為」を犯すことはできなかった。

というのは父親の倒産と自殺のあとで、社会的な失墜が女に何をもたらすか、それをアルマに教えたのが、ほかならぬシビルだった。「今まで予想すらしなかったようなこと」が起き、「女にとってお金が想像以上の意味を持ち」、「問題はあなたが狙う人ではなくて、あなたを狙う人なのよ」(63, 傍点ギッシング)とシビルはいった。さらにシビルはアルマの耳に音楽で自立してみたらと囁き、ハーヴェイ・ロルフは面白い人よとほめかしている。「シビル」には「魔女」または「巫女」という意味があるが、²⁵シビルはアルマの魔女であり巫女だった。シビルはアルマを待ち受けている運命が姦通であることを予告したのだ。

小説でシビルが最初に登場するのは、フロシガムが自殺したあの夜の、アルマの演奏会のシーンである。彼女はレッドグレイヴと並んで座り、「椅子

の上にくずれた姿勢で座っている[レッドグレイヴの]頭がときどきミセス・カーナビイの肩にさわりそうになった」(32)とある。ヘンリー・ジェイムズの『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*, 1881)で、夫オズモンド(Osmond)が座っているその前にマダム・マール(Mme. Merle)が立っているという構図がイザベル(Isabel)の心に暗い影を落としたことを考えると、『渦』のこの場面も意味深長である。レッドグレイヴとシビルの関係は、シビルの父アスコット・ラクフィールド(Ascot Larkfield)の死亡時にさかのぼり、残された未亡人と娘にレッドグレイヴが何らかの援助をしたようだが、それも風の噂、この二人の目に見えない関係はアルマの妄想を生み、それが彼女のオブセッションになっていく。

シビルを描くとき、作者は間接表現をことさら多用している。ロルフの目に映るシビルは、「ときどき冷たい仮面になり洪面を作った」(33)。夫カーナビイにとっての彼女は新婚以来の「小鳥ちゃん」(57)であり、バンガローの事件のあとですら「純粋で無垢な女」(319)でありつづける。フロシガム事件のあと3年ぶりに会ったシビルは、前とは違った姿を見せた。アルマのその後の経験がシビルを見る目を一変させたのだ。父フロシガムの倒産で財産を失ったシビルの真意はどこにあるのか。いまや結婚して経済的には優位に立ったアルマ、音楽家になる希望に燃える美しいアルマにシビルは嫉妬し、旧知のレッドグレイヴがそんなアルマに肩入れしているのが許せないのではないか。かたや、そのレッドグレイヴがカーナビイの自転車製造業に出資したのは、シビルとの親密な関係を裏付けているのではないか。演奏会がすむまでは、レッドグレイヴを自分に惹きつけておかなければ、などなど。アルマ自身の野心と疑心によってシビルは変容し、パールのもうこうに遠ざかるばかりである。「女性らしさの理想」(62-63)を実現した女性にもなるし、「金のために自分を売った女、街娼とかわらぬ女」(363)にもなる。

アルマとシビルはレッドグレイヴのバンガローで、つまり四つ目の住まいを舞台に雌雄を決することになる。バンガローは当時の富裕層に人気があった建築物で、²⁶豪華なバンガローを建てたレッドグレイヴはそれを人寄せの口実に利用していた。アルマも「そのエキゾチックな呼び名」(198)に心惹かれるものがあつた。門が閉じていても、庭に回って大きなフランス窓から自由に出入りできるその斬新な構造が、ヒュー・カーナビイには不運だった。

On passing to the farther side, he would come within view of those windows which opened so conveniently [...]. He saw two figures standing in a dim light from the

window-door—a man and woman [. . .]. (290)

オセロはデズデモーナを殺し、カーナビイは相手の男を殺す。男の相手は妻ではなくアルマだったのに。ここで見逃してならないのは、フランス窓の中にいたアルマがシビルに見えたことだ。アルマもまた、シビルがカーナビイの遠出（その彼にアルマは偶然出会っていた）をいいことに、バンガローにきていると邪推して、訪れたのだ。アルマがフランス窓から入ったとき、レッドグレイヴは人待ち顔をしていた。シビルを待っていたのだ。そのシビルがこなかったのは、たまたま母親の臨終を知らせる電報がきて、逢引の予定が狂っただけだ。アルマはこうして不在のシビルに翻弄される。そして「もしカーナビイが現れなかったら、どんな結果になっていたか？」(371)

She had never loved Redgrave, had never even thought of him with that curiosity which piques the flesh; yet so inseparably was he associated with her life at its point of utmost tension and ardour, that she could not bear to yield to any other woman a closer intimacy, a prior claim. At her peril she had tempted him, and up to the fatal moment she was still holding her own in the game which had become her passion. It ended—because a rival came between. (362–63)

つまり、カーナビイが現れなければ、アルマはシビルに、つまりは「アダルトレス」になっていたというのだ。“curiosity,” “the flesh,” “ardour,” “a closer intimacy,” “passion” といった言葉の一つひとつが「姦通」という違反行為のキーワードであり、アルマが不在のシビルとの間にレッドグレイヴを頂点とする三角関係を築き、姦通が彼女の意識に入り込んでいることが強調されている。このとき、“a rival” が登場し、「ゲーム」は終わったとある。この不定冠詞つきのライバルの出現によって終わったゲームとは、まずは文脈から見て、シビルからレッドグレイヴを奪い返すべく、アルマが意識下にせよ想定していた姦通がライバルの出現によって未遂に終わったことを意味し、ついでカーナビイ本人がライバルとして、妻の姦通相手を殺したことを意味している。ギッシングの描く姦通があまりにも曖昧な表現に終始し、実態が見えないという不満は残るにせよ、アルマの姦通が結局は想像上にとどまり、同時に謎に包まれたシビルの姦通を事実上断罪する舞台となった深夜のバンガローは、『渦』におけるもっとも印象的なシーンとなっている。

かくして姦通の瀬戸際から逃れたアルマは、姦通を犯した女に等しい眠れぬ夜の苦しい瞑想の中で、謎のベールを脱いだシビルをはっきりと見る。

[...] a woman incapable of love, or of the passion which stimulates it; worshipping herself, offering luxuries to her cold flesh as to an idol; scornful of the possibility that she might ever come to lack what she desired; and at the critical moment, prompt to secure herself against such danger by the smiling, cynical acceptance of whatsoever shame. (364)

これは一匹の蛇である。作者はここで、アルマ自身が「謎めいたシビルの実像に近づいていた」(364)と解説している。シビルはアルマの運命を予告し、アルマを誘惑し、アルマの脳裏に棲みついて、アルマのすべてを滅ぼすまで奥へ奥へと巢食っていく。これがシビルの正体であり、姦通をめぐるアルマとシビルの共犯関係である。だが、自分の頭の中だけに棲息する女の正体を、だれが理解するというのか。犯さなかった姦通を、だれが信じるというのか。アルマは、あの哀れなモニカと同じく、夫にそれを信じさせることはできなかった。しかもロルフは妻の苦悩を知りながら、真相解明の努力もせず、「たった一つの疑い」に「一生悩まされる」のかという諦観に逃げる(445-46)。アルマもまた姦通をめぐる真実に絶望して、夜明けを待たずに死ぬ。

生き残り、独りになったシビルは、間接表現から抜け出して読者の目に直接さらされる。それはアルマが悪夢で見たとおりの女だった。「唇は、その見事な輪郭が冷笑するようにゆがんで醜くこわばり、その瞳は、邪悪なまでに細められて、心に浮かぶ映像に見入っていた」(430)。蛇さながらの素顔を華やかな微笑で隠し、シビルは「美しくて元気な女性」(431)として、夫の兄のカーナビイ少佐を出迎えに行く。

このようにシビルはあきらかにクロなのだから、シビルを単独のヒロインにした「姦通小説」が書けたかということ、それはギッシングの手に余ることだったのだろう。しかし時代はギッシングを追い越していた。すでに20世紀が目前にせまり、人間の両義性を二人の人物で描き分ける時代は終わり、人間の心の闇は言葉にすればするほど暗さをます時代がきていた。たとえばヘンリー・ジェームズが女家庭教師の永遠の独り芝居、『ねじの回転』(*The Turn of the Screw*)を出すのは、『渦』の翌年、1898年のことである。しかしながら、アルマが乱れた意識の中で最後に発した「わたしが知っていることは、あなたにはとうていわからないのよ」(443, 傍点ギッシング)という言葉を、ここまできたプロセスの中に置いて、よくよく考えてみると、小説がもっとも得意とするはずのテーマ、つまり「貞節か、姦通か」という事象の本質に触れている言葉のように聞こえる。「わたしが知っていること」とは、シビルと

自分自身の共犯関係を認めたアルマの、犯さなかった姦通はなかった、という逆説的な認識ではなかったか。苦しい最後の眠りの中で、アルマはこの言葉を繰り返していたことだろう。貞節といい、姦通といい、その核心はつまるところ、肉体と精神の境界線はかぎりなく曖昧になり、人間存在あるいは真実というものの見えにくさにつながっていきと考えられる。トニー・タナーが前掲書でいみじくも聖書を引いたように、姦通は行為の域を脱して意識に入り込み、姦通を犯した女に「石」を投げられる人間は、すでに一人もいないのだから。²⁷

『渦』はウォルター・アレンの『イギリスの小説』（南雲堂、1984）のギッシングの項にも記載がなく、ギッシングの代表作という栄誉は他の作品に与えられているけれども、ここに見たとおり、多くの男女が複雑に絡みあいながらも生き生きとしていて、長いストーリーも破綻なく進行している。とかくヴィクトリア朝小説というと、婦人参政権とか貧困問題といった当時の社会問題の資料みたいな読み方ばかりが先行するくらいがあるが、『渦』は世紀末のイギリスが抱えていた社会問題が前面にしゃしゃり出る小説ではない。むしろ、ヴィクトリア朝後期の揺れ動く価値観の中で生きたヒロイン、アルマの孤独な闘いが、姦通という経験が一人の女の人生にとっていかに大きな試練であったかを如実に伝えており、それは同時に、姦通という小説本来のテーマに挑んだ小説家ギッシングの孤独な闘いの軌跡に重なっていよう。ともあれ『渦』は、ロルフやアルマといった主要な人物だけでなく、小さなエピソードに出てくるだけの脇役にも同様に注がれた作者の深いまなざしが、19世紀末のイギリスという時と場を生きた人間一人ひとりに役割を与え、細部がたがいに積み重なって、大きな川の流れるような小説本来のダイナミズムを実現させている。

最後に、『渦』に出てくる男性の過去の逸話を確認しておこう。ロルフとフロシガムのごとは上述のとおりとして、セシル・モーフェウは「永い春」の禁欲にたえかねて、公園で出会った娘と関係し、生まれた子どもはすぐ死んだのに、娘に騙されて最近まで養育費を払っていた。メアリ・アボットと結婚した絵画教師のシスルウッド(Thistlewood)は、パリで過ごした学生時代に浪費癖のある娘が好きになり、そのライバルにフォークで手を刺されて指を一本なくしている。ギッシングの苦しい青春時代と惨めな二度の結婚はあまりにも有名だが、登場人物にからめた若気の過ちの数々に、晩年のギッシングのゆとりと円熟が見えるようだ。新旧が交錯するイギリスという国、ヴィクトリア朝という繁栄と矛盾が混在した時代に生きたギッシングに、哀惜は

あっても後悔はなかったと思う。『渦』は作者自身が好きだった作品である。²⁸ 必ず黒い怨念とか、明日をも知れぬ貧困といった修羅場なしで書いているところがとてもいい。「さようならをいいなさい、ヒューイ」という主人公の最後の言葉には、時代の終わりと始まりが和解しているような響きすら感じられる。19世紀末イギリスのヴィクトリア朝博覧会に招かれ、光と影につつまれた会場を丹念に見ているような、羨望にも似た満足感をおぼえる作品である。

註

テキストは George Gissing, *The Whirlpool*, edited and with a new introduction and notes by Patrick Parrinder (Brighton: Harvester, 1977) を使用した。

- 1 富山太佳夫、『ポバイの影に』（みすず書房、1996）133-39。なお、家を城と考えるイギリス人にとって、住宅購入意欲は今も加熱する一方である。*Times*, 23 October 2002 によれば、ロンドン市内の寝室が四つあるテラス・ハウスは、1889年には520ポンド(今日の価値では33,500ポンドに相当)で、当時は鉄道の工夫長の年収相当額だったが、今日では最低でも550,000ポンドになるとある。
- 2 故ダイアナ妃の義理の母レディ・スペンサーの子息の荘園の猟場管理人(ゲーム・キーパー)の年収は17,000ポンドである。*Times*, 18 October 2002.
- 3 『渦』の執筆前後のイギリス文壇事情、ギッシングの執筆環境、『渦』の書評、ギッシングとロルフの類似、ピエール・クスティヤス氏から教示された作者の誤認による年号のずれ、などについては、上記テキストの邦訳書『渦』(太田良子訳、国書刊行会、1989)の「訳者あとがき」に書いたもので、ここでは割愛する。なおこの拙訳書には残念ながら一部に不正確な個所があり、深くお詫びする。本論の引用文は必要に応じて改訳した。
- 4 1870年と1882年の法律制定によって、既婚女性財産権はほぼ確立した。
- 5 「フラット」の流行その他については、『渦』(既出)446の編註を参照。
- 6 松村昌家、「ヴィクトリア時代の移民」、『民衆の文化誌』(研究社出版、1996)117以下。19世紀半ばに始まる金鉱発見にともなう移民の急増という現象が述べられ、ロルフが感じた移民政策の矛盾はディケンズが憂慮したものに通じることがわかる。
- 7 Abbey National など、イギリスの投資会社の大手数社では、500ポンド以上の投資資金には、今でも4%以上の金利を保証している。*Sunday Times*, 20 October 2002.
- 8 1849年のカリフォルニアの金鉱発見を皮切りに、1851年にはオーストラリアで、1886年には南アフリカのトランスヴァールで金鉱が見つかり、ボーア戦

第9章 『渦』

争勃発につながる。

- 9 清水一嘉、『自転車に乗る漱石』（朝日選書，2001）241-66。
- 10 戸矢理衣奈、『下着の誕生』（講談社，2000）186 以下。
- 11 イギリス人 William Talbot (1800-77) は写真のネガとポジを作る技術を発明し、バース近郊のレイコック村(Lacock)には「タルボット写真博物館」がある。
- 12 長島伸一、『世紀末までの大英帝国』（法政大学出版会，1987）164-67。
- 13 エドワード・ラザフォード、『ロンドン』鈴木主税・桃井緑美子訳（集英社，2001）457。
- 14 小池滋、『島国の世紀』（文藝春秋，1987）212。
- 15 『渦』に出てくる音楽会の選曲や演奏会場については、『渦』編註 447-49。ギッシングはロンドンの音楽事情を最初に小説に取り入れた作家であり、その後継者は E・M・フォスターとある。また、当時人気の画家、ジェームズ・ティソ (James Tissot, 1836-1902) の代表作 “Hush, the Concert!” (1875 年頃) は、ヴァイオリンを肩に当てた白いドレス姿の婦人が演奏に入る寸前をとらえた油絵で、『渦』のアルマを描いたような作品である。109 頁参照。
- 16 富山太佳夫、『シャーロック・ホームズの世紀末』（青土社，1993）77 には、1872 年で有資格の女医は 8 名，1911 年の 495 名でも女医は全医者 of 2% 以下とある。
- 17 ジョージ・ギッシング、『三文文士』土井治訳（秀文インターナショナル，1988）48。
- 18 アルマが手放したヴィヨームはヴァイオリンの名器だったよし。『渦』編註 447。
- 19 Tony Tanner, *Adultery in the Novel* (Johns Hopkins UP, 1981) 3, 12.
- 20 ジョージ・ギッシング、『余計者の女たち』太田良子訳（秀文インターナショナル，1988）48。
- 21 工藤庸子，「フェミニテを問う女たち」、『ヒロインの時代』（国書刊行会，1989）281。なお、小谷野敦、『聖母のいない国』（青土社，2002）では、美貌のヒロインを持つ小説が、フェミニズムからも文芸批評からも疎んじられてきた経緯が看破されており、目から鱗が落ちた。
- 22 北條文緒，「『ヒロインの時代』は男性作家の時代」、『ヒロインの時代』（同上）111 以下。
- 23 妊娠，その不安，出産，流産などはすべて，「遠まわしのヒント」のみで示される。『渦』編註 447。
- 24 工藤庸子，269。
- 25 シビルという名前は，ベンジャミン・ディズレイリの小説『シビル』(*Sybil, or the Two Nations*, 1845) および，オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの画像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1890) のドリアンの相手役に使われている。
- 26 「バンガロー」については『渦』編註 447。
- 27 工藤庸子氏は前掲書に以下の注を付している。「『姦通』とは，周囲にはりめ

ぐらされた不自由な現実に対し、自分の全存在を賭けて闘いを挑むことであり、闘い破れて死を選んだアンナ・カレーニナは、姦通の女の典型である。これが、日常性のなかの恋愛ゲーム、いわゆる『不倫』と異なることは言うまでもない。『不倫』には『違反行為』としての破壊力がない。それは現代社会において家族制度の神聖さが失われ、反抗の対象が崩壊しはじめていることと無関係ではないだろう。エンマの恋愛がロマン派の恋愛のパロディーであるのと同じ意味合いで『不倫』は『姦通』のパロディーである」。このコメントは、「姦通」がすべて「不倫」になると「小説」はどうなるのか、われわれが直面している危機を示唆している。

- 28 Halperin 238. ここには「ぼくはこの新作に満足しており、自作のうちでも最良の作品の一つの考えている」というギッシングの言葉が出ている。ハルペリン自身もこれに続けて、ギッシングの小説の中でも「おそらくもっともよく書けた作品」と解説している。

(太田良子)